

享月

衆新
月刊

2021年(令和3年)6月22日(火)

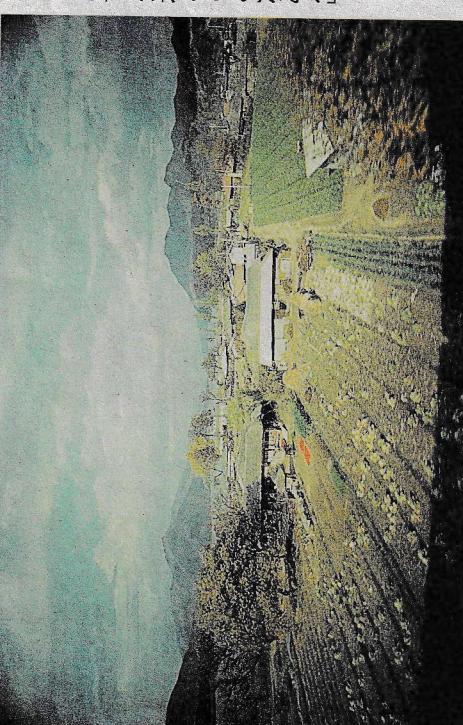
第3種郵便物認可

文化

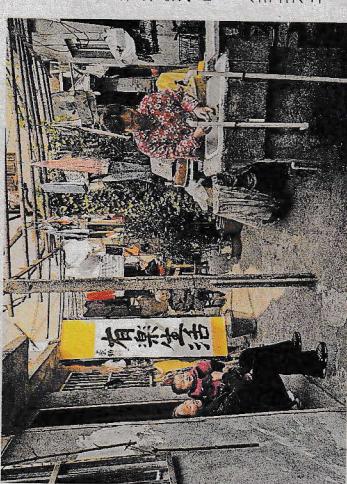
✉bunka@asahi.com

日曜～金曜掲載

風景を人を変えてしまる五輪



1976年。韓国・ソウルから列車に乗り、慶尚北道へ向かう車窓で美しい農村風景が目に飛び込んできた。ありふれた田舎かまもしれないが、おどきの国に見えた。後年この奇跡的な出会いの写真に「こんなところで死にたいと思わせる風景が、一瞬、目の前を通過することがある」



❶一瞬で魅了されたという車窓の風景|1976年、韓国慶尚北道の鳳陽面付近❷新しいビルが次々建つ中で、昔ながらの住まいと生活が形をとどめていた。後ろの掛け軸は藤原新也さんの筆|2011年中国・上海市内。いずれも藤原新也さん撮影

写真家・作家 藤原新也さんに聞く

この文をつけ、著書『メメント・モリ』に収めた。

その風景が忘れられず、2年後の同じ真冬に村を訪ねた。写真に写っている家の前に行くとおばあさんが出て来るので「こんなにちは」とあいさつした。すると、たどたどしい日本語で「昼飯食つてけ」。縁側に温かい米のごき汁、キムチごはんほかのご飯を載せたお盆を置いてくれた。そのシンプルな美味しさに、ああ、これが韓国古来の食事なんだ、食文化の根っこを味わいたいと思いました。

以降、韓国へ行くたびに訪ねたが、90年に足を運んだとき、立ち墳んだ。見渡す限りの墓地

ぶじわら・しんや 1944年生まれ。代表作に『印度激浪』『全東洋街道』『東京漂流』など。『メメント・モリ』は朝日新聞出版、上海の町並みを収録した『貴行無常』は集英社刊。

塊 今なね

が広がっている。その2年前のソウル五輪を機に高速道路が開通し、役所がアーチ型を建て住民を立ち退かせたのだといふ。

おばあさんは病院にいた。生きがいだった畠仕事を失い、別人のようにやさぎ込んでいた。五輪は風景を変え、人を変える。大義名分の下、すべてが進む。そこのはそりのかひばかりブルドーザーが風景を壊し、古くからの文化も人心も一緒に、一気呵成に押しつぶしていく。

2011年。中国・上海の路地裏を歩いた。その3年前の北京五輪前後、北京の胡同の取り壊しが話題になつたが、上海でも古くからの庶民の住居群が五輪のために減っていた。かろうじて残る一角に足を踏み入れられたのは幸いだった。

林立する摩天楼の下、つまり住まいがへりつゝように軒を連ねる。路地にはにぎやかな笑い声が響き、洗濯物が風に揺れ、子どもをあやす平和な時間が流れている。僕は強烈な懐かしさを感じた。

これとまったく同様の変貌が、つい最近の東京でも起きたことを、人はもう忘れているのではないか。18年に豊洲に移転し、跡地が大型駐車場に変わった築地市場である。

知人の魚屋さんによれば、豊洲に通わなくなつた小さな魚屋は多い。冷房のきいた、こぎれいな建物よりも、仕切りの壁を造らず自然の風を通して魚の鮮度を保つという、先人の知恵が息づいていた築地の情景を彼らは惜しむのだ。

欧洲の貴族文化に端を発した近代五輪が、華やかな祭りの影で世界の土着文化を破壊していく「裏の歴史」。それは今も、厳然と積み重ねられ続けている。

たとえ首相が中止を求めても五輪を開催する。IOC（国際オリンピック委員会）の重鎮による屈辱的発言が報じられたが、無理こくつた政治者の姿を見るにつけて、英語なら単純にOlympic Flameと言つて、「聖火」と神がかった語を使う日本社会を考えさせられた。

そこには音々として一丸となり、五輪を崇め奉る、独特の感性がないだろうか？ 先進国に仲間入りする関門としての初開催から半世紀余、なお後進的な心性は変わらない。

アスリートたちが一心不乱に闘う姿は美しい。五輪という大舞台ならばではの魅力を、僕は素直に認める。

だからこそ遠くから、長い時間軸で、日本人の自画像を見つめ直さなければならない。私たちの主体性は一体、どこにあるのか。（構成・藤生亮子）